

清閑亭の 歴史と魅力



小田原の自然環境が育んだ別邸文化を追体験できる清閑亭。茶会でのもてなしを意識した趣向を凝らした意匠を持っていることから、小田原、広くは日本の”おもてなし”を満喫していただけるような環境が整っています。

1. 清閑亭の特徴



清閑亭は、明治時代に活躍した黒田長成侯爵(福岡・黒田家17代当主)の別邸として明治39年(1906年)に建築され、趣のある庭園を備えています。建物は、東西に広がる雁行状の平面をとる優れた外観を残す数寄屋風建築であり、近隣の別邸と同様に、茶会でのもてなしを意識した趣向を凝らした意匠を持っています。具体的には、杉の特性と姿を生かした丁寧

な仕事に加え、屋久杉や榎など全国の銘木、工芸品を取り寄せた造りとなっています。

室内空間も趣向が凝らされ、相模灘を望む南側の丘陵からの眺望を生かし、庭園と一体となった開放性の高い造りとなっています。また、意匠に関しては、棟毎に垂木の意匠、部屋毎に天井や床の造りがそれぞれ異なる座敷空間で構成されています。個々には欄間の意匠、建具、七宝焼きを使った襖の引手など、細部のデザインまでこだわっています。



くろだながしげ

黒田長成(1867年-1939年)

公家・旧大名、政治家。福岡県出身。

旧福岡藩主黒田長知の長男。明治11年(1878年)家督を相続、同17年(1884年)侯爵、英国ケンブリッジ大学留学。帰国後、同25年(1892年)から終身、貴族院議員を務め、同27年(1894年)に貴族院副議長に就任した。

2. 小田原と別邸文化

清閑亭が建築された背景の一つに、明治32年(1899年)に旧小田原城内に御用邸の建設が始まって以来、小田原には時の有力者の別荘・別邸が多く建築されていたことが挙げられます。特に日露戦争が終結した明治38年(1905年)以降、建設に拍車がかかり、小田原での「別荘ブーム」が始まりました。

小田原での別荘建築の始まりは明治21年(1888年)まで遡り、多くの別荘が海岸に建築されました。これらは欧米文化を模倣したためです。これに対し、清閑亭をはじめとする20世紀初頭の別荘郡は、海を見晴らす別荘という新たな文化が創造されました。その中でも最も海に近い天神山丘陵の一部の南向き斜面地の高台(小田原城址公園の南側)に位置していることから、小田原のまちや箱根山系、相模灘、伊豆半島、三浦半島などを見渡すことのできるすばらしい眺望があり、新たな文化を最もよく体現する重要な建物です。

明治時代には、これらの眺望や温暖な気候、古くから交通の要所であったことなどから、政財界人や文化人などの別荘・別邸が多く建築されました。清閑亭もこれらを代表する建物のひとつであり、近くには黒田家とゆかりのある閑院宮家の別邸などもあります。



3. 清閑亭の持つ歴史の重層性と追体験

建物は、平成17年に国登録有形文化財に登録されました。また、国指定史跡小田原城跡の三の丸外郭上の清閑亭土塁に位置しており、この土塁遺構は、小田原城跡の低地部外郭と丘陵部外郭の結節点に位置し、中世から近世の城構えの様子を今に感じることが出来る貴重な遺構となっています。

小田原に別邸を構えた近代の政財界人の中には、山縣有朋や益田孝など、風光明媚な小田原の自然ばかりでなく、関東に覇を唱えた戦国大名北条氏の小田原城やこれを破った豊臣秀吉の石垣山城など、小田原の歴史やその遺構に少なからず思いを寄せた者があり、福岡藩祖である黒田如水から数えて14代目の黒田長成についても、庭園から石垣山を望めるこの地に清閑亭を建築したことから同様の意識を伺うことができます。かつてと変わらぬ風景を目の前にして歴史を追体験できることこそが、小田原に別荘を構える新たな価値と見出したのかもしれない。

また、黒田長成は、約30年にわたり貴族院の副議長を務めたため、近代の日本において歴史上重要な会談等が、清閑亭で行われていたことも考えられます。

4. これまでの活用方法

歴史的・文化的資源である清閑亭の回遊・交流拠点としての活用を核として、イベント、ギャラリー等の催しを実施するとともに、清閑亭と同じ近現代の別邸である小田原文学館

及び松永記念館等の歴史的風致形成建造物等と連携し、近代邸園文化で培われ、固有のなりわいや生活文化を生かした南町・板橋周辺地区への回遊性拡大を図るなど地域の特色を生かした文化観光によるまちづくりを推進してきました。

主な催しの内容は、次のとおりです。

- ・市内で活動している芸術家等による展示(木工、絵画、書、現代美実、鋳物等)
- ・小田原市ゆかりの各種展示(別邸文化、鉄道史等)
- ・季節、別邸文化を感じる催し(七夕、雛祭り、健康等)
- ・和文化体験(和の室礼展、掃除、門松作り、抹茶体験等)
- ・清閑亭を基点とした各種まちあるき

【イベント実績(令和元年度)】

種 別	総イベント数	総参加者数
展示系	19回	18,131人
講演会系	14回	672人
ワークショップ系	21回	236人
コンサート系	3回	69人
まちあるき	39回	524人
その他	37回	474人



【維持管理費(令和元年度参考)】

光熱水費	450,000円
修繕費	1,500,000円
庭園整備料	2,500,000円
合 計	4,450,000円

【来館者数(業務委託開始以降)】

平成 24 年(2012 年)	20,777 人
平成 25 年(2013 年)	22,324 人
平成 26 年(2014 年)	24,190 人
平成 27 年(2015 年)	29,007 人
平成 28 年(2016 年)	33,201 人
平成 29 年(2017 年)	33,102 人
平成 30 年(2018 年)	25,712 人
令和元年度(2019 年)	21,421 人





正門から主屋までの上り坂



主屋玄関



主屋を南東側から



気品のある室内



主屋北側にある中庭



絵画のような風景を窓から